
一番乗りのメール

木月 愛美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一番乗りのメール

【Nコード】

N1250D

【作者名】

木月 愛美

【あらすじ】

今の自分で本当にいいのか。何かもつと他の道もあったのではないだろうか。そう悩んでいる人に読んで貰いたい物語です。

携帯電話が壊れてしまった。固いアスファルトにダイブさせた訳でも、洗濯機で掻き回された訳でもない。突然に電源が入らなくなってしまったのだ。

「データが全て消えてしまう可能性があります、よろしいですか」
「はい」

わたしは仕方なく修理に出した。まだ買って一年も経たない携帯電話だったので、保険がきいて修理は無料になった。

「お盆を挟むので、修理が完了するのは早くても二週間後になります」

「はい」

「では代替機をお貸ししますね。メールアドレスと電話番号は同じです。機種はどれがよろしいですか」

携帯電話が三機並べられた。うーん、どれもあまりぱっとしないな。

「じゃあ、これで」

その中で一番マシかなと、思うものを指差した。

「あのー、データってこれに移せないんですか」

「申し訳ありません。電源さえ入れれば、移すことは可能なのですが、電源が入らないことには……」

「そうですか」

携帯電話のデータが消えてしまうかもしれないこと。修理が完了したら電話で通知すること。修理は二週間以上はかかること。店員さんは書類をわたしに見せながら、そんなことを事務的に確認した。いまいちおじさんくさい代替機を握り占めて、自動ドアを抜けた。外の空気は、携帯電話ショップの空気が存在しないものだったのではないかと思うくらい、生暖かった。でも手の中にはおじさんくさい代替機がある。振り返ると確かに、携帯電話ショップが見えた。

それにしても、データがないというのは困る。友達の手紙アドレスやらを、誰一人のものとして覚えても、書き残してもいないのだ。メールが来るのを待つしかない。それはなんだか、とても難しいことに思われた。

「はあ」

これはなんていうんだろう。泣きつ面に蜂？ 弱り目に祟り目？ わたしはとても落ち込んでいた。まあ、何か大きなことがあったって訳じゃない。どこにでもあつて有り触れすぎている、すごくくだらないこと。先生に叱られてしまった。それだけ。わたしがふらふらしているから。

どんなに有り触れていても、いちいちそれによつて一喜一憂する人間なんて悲しい程単純だ。それだからこそ味があるのだろうけれど。

昨日買ったばかりの馴れない靴を履いていた為、足が痛くなつてしまった。辺りを見渡して椅子を探した。けれど冷たい街にはそんなものはない。

街を歩く人はみんな冷たい、どこか思い詰めたような表情をしている。わたしのことなんて、かまってくれる訳ないよね。或はわたしが憂鬱な気分だから、周りの景色もそう映るのだろうか。映しているのは憂鬱なわたしの瞳だし。

喫茶店に入ろうかと考えた。でもな、一人で喫茶店というものもな。悲しいじゃん。だけどやっぱり足が痛くて、喉が渴いた。それに何より、いろいろなことがあつて疲れてしまった。ファミリーストランにひとりで入るよりは全然いいよね。そうポジティブに思考し、側にある喫茶店に入った。

扉の上の方に付いている鈴が、がらんがらんとうるさいくらいに鳴った。

「あ」

一番奥の席に見覚えのある顔があつた。高校の時のクラスメートの香住ちゃん。

わたしは喫茶店の奥へと進み、香住ちゃんに声を掛けた。当の香住ちゃんはノートパソコンと睨み合っていた。

「香住ちゃん」

香住ちゃんはノートパソコンから、ゆっくり顔を上げた。

「ええっ！ 碧ちゃん？」

香住ちゃんはわたしより大分小柄な、誰もがかわいいと叫んでしまふような女の子だ。女の子っていうのは少しおかしいか。彼女だつてわたしと同年だ。

「香住ちゃんは誰かと待ち合わせでもしてるの？」

「そういう訳では、ないんだよね」

そう言いながら、ノートパソコンをぱたんと閉めた。

「そうだ、碧ちゃん。ここ座つてよ。なんか寂しいから」

香住ちゃんは自分の向かいの席を指差した。木で作られたお洒落な椅子だ。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

香住ちゃんのかわいらしい笑顔に完敗したわたしは、椅子を引いて腰掛けた。椅子の足と床との相性が悪いせいか、それらが擦れる思わず目をつむってしまうような音がした。

「碧ちゃん、お店巡りはいいよ。外は暑いし、家に居ると冷房代が嵩むし。だけどさ外出しちゃってれば、そんなのないし」

そして、やったあ道連れができてと言って、にこつと笑った。こちらも嬉しくなってしまうような笑みだった。

「碧ちゃんは何か用があるの？ あつたらごめん。なんか引き止めちゃつて」

香住ちゃんが気付いたように言った。かわいいな、香住ちゃん。「ううん、そんな。むしろ香住ちゃんがいてよかった。外は暑いし、喉が渴いたし。足も痛いし、家に帰る気もないし。別に用は全然ないの」

他にも理由がないと言ったら嘘になる。他つて言えば、たいしたことないことばかりだけれど。言葉に出して言うのも面倒なので、

隠した。

あ、そうか。香住ちゃんもそうなのかもしれない。あの無邪気な笑顔の裏に、いろいろなことを隠している。

別に打ち明けて貰いたい訳でもなく、香住ちゃんに深入りする気もない。ただの高校時代のクラスメート。ただの偶然、喫茶店で会っただけ。よくあることだ。

わたしと香住ちゃんはもう五年くらい会っていないはずなのに、いろいろなことが口から出た。昨日の続きが始まるように。

高校の同級生のこと。男の人について。流行りのアイドルのこと。A組の麻衣ちゃんは数学の小野先生と結婚したらしいよ。最近売り出したあのグループ、わたし嫌いなもの。男の手料理ってなんだかねえ？

「碧ちゃんってさ、一人暮らし？」

「うん、そうだけど。どうして？」

「最近、みんな一人暮らししてて偉いなあと思って。わたしは絶対無理だよ」

高校三年の時の、今考えたら最後の席替えで決めた席の時、わたしと香住ちゃんは隣同士になったのだ。わたしも香住ちゃんも受験がもう終わっていたし、授業なんて全く聞く気がない。そこでわたし達はありとあらゆることをして、上手く遊んでいたのだった。例えば、先生の癖を見付けるのに夢中になってみたり。自己満足のリー小説を書いてみたり。紙飛行機を作って飛ばしてみたり。

それがとても面白くて、そのうち二人で過ごす時間がほんの少しずつ増えていった。こんな感じでどんどん仲良くなれるんじゃないかなあと感じてきた頃、高校を卒業してしまったのだった。

「もう暗くなってきたし、わたしそろそろ帰るね」

財布を探す為、鞆の中をまさぐった。

「大丈夫。お金はちゃんと払って行くから」

冗談でそう言ったら、

「碧ちゃん！ わたしが全部奢る」

と焦りながら、真剣な表情で香住ちゃんが言った。
「だから……、だから今日一晩だけ泊めて欲しいの」

だからだったのか。誰と住んでいるのか。そんなことを香住ちゃんがどこことなく聞き出していたのは。

「ごめんね、本当に」

香住ちゃんはわたしの背中に言った。

わたしはアップルジュースを二つのコップに分けているところだ。うちにはお盆というお洒落なものは備わっていないので、コップを二つ手で持ってテレビの前のテーブルへ向かった。

香住ちゃんは大分わたしに申し訳なさを感じているようで、さつきから元気がなくて俯いている。そんな香住ちゃんを宥める為に、わたしは大袈裟に明るく振る舞った。

「なんだかさ、林間学校に行つたみたいだね」

香住ちゃんはただ、うんと頷いた。

「やっぱり誰かが居るっていいね。ひとりだとき、後ろに幽霊が居たらどうしようとか変なこと考えちゃうんだよね」

うん。

香住ちゃんの頭が縦に振れる。

「ありがとう、碧ちゃん。本当に。わたしね親と喧嘩しちゃって、たいした喧嘩じゃないんだけど。だけど帰りにくくて」

泣きそうな顔で言った。なんだかわたしは悪いことをしたような気分になって、もっと明るく振る舞った。

「それよりさ、何かして遊ぼうよ。折角、香住ちゃんもいるんだから」

ねっ？

「ありがとう、碧ちゃん」

さつきと全く同じ言葉を穿いて、香住ちゃんは笑った。泣きそうな顔で笑った。

「香住ちゃん、トランプ。トランプしようよ」

早口で喋ったのは、香住ちゃんの本当の姿を見たくない、弱いわ
たしだった。

「うん。本当に本当に林間学校みたい」

わたし達はいろいろと悩んだ末、七並べをすることにした。家に
あったトランプは大分昔のもので、枚数が揃っていそうになかった
ので、それを調べる為にも七並べが最適だと思ったのだ。

「ここの6溜めてるでしょう」

香住ちゃんにも少し元気が戻ったようだ。よかった。香住ちゃん、
同じ年なのに妹みたい。

「えへへ。テクニクだよ」

二人で七並べというのは実に間違った選択だった。だって相手の
持っているカードを、自分のカードから予測できるのだから。それ
でも本当に学生時代に戻ったみたいで楽しくて、何かある度にふた
りで笑い合った。……学生時代？ 学生時代はこんな生活を繰り返
していたのだろうか。

「碧ちゃん意地悪だなあ。ここも止めてるでしょ」

香住ちゃんはハートの3の隣を、こんこんと突いた。

ハートの4。

溜めてるかなあ。心あたりがなかったので、手札を探してみた。

だが、ハートの4は見当たらなかった。

「ないよ。持ってない」

「嘘でしょう」

「嘘じゃないって。本当にないんだから」

「あ、じゃあないんじゃない？」

「ないって？」

「えっと、ほら元々」

「ああ、そっか」

そういえば元々、ないカードを調べる為にやった七並べだった。
ハートの4がないってことだ。

「あーあ、残念」

本当に残念そうに香住ちゃんが言った。

「何が？」

「だってわたし、四つていう数字が一番好きなの」

四は不吉なんじゃないかな。それでもそれが好きだと香住ちゃん
は言う。

「どうして四が好きなの？」

「聞きたい？」

「もちろん。聞きたいから聞いているの。……もしかして、ふっかい
訳とかあるの？」

「ははは。そんな深くないよ。ただの新聞記事」

香住ちゃんは視線を落として、ハートの4のあるべき場所を指で
撫でた。

「四つていう数字って“死”とか連想して不吉だってみんなは言う
けど」

「そうだよ。不吉だよ」

「でも、四つ葉のクローバーの葉っぱも四枚なんだよ。四つ葉のク
ローバーは幸せを呼ぶって言うでしょ」

やっぱり香住ちゃんは凄い。四を不吉な数字と考える一般論を、
軽々と飛び越え、自分のものにしてしまった。

「なるほど」

本当は声なんか出ない程感銘を受けていたけど、努めて平静を装
った。

「あとね、そのクローバーだけど四つの葉っぱそれぞれが、誠実、
希望、愛、幸運を表してるんだって」

誠実。希望。愛。幸運。

みんな抽象的なものだ。だけど、それらを信じていることができてし
まうのは何故だろう。

香住ちゃんわたしにとって、よくわからない人物だ。謎に包ま
れている感じがするのだ。かわいい容姿でいつもきやあきやあ騒い
でいるのに、実は誰よりも大人っぽくて。いつも大声で歌ばかり歌

っているのに、作文がとにかく上手くていつも読書感想文のクラス代表で。独り言がとにかく多くて、物凄いロマンチストで。天然過ぎる程天然なのに、意外と頭も良くて。時々誰も考えもしないようなことを、ぱつと口にする。

例えば、四という数字が好きだとか。

「ふうん。なんだか凄いね」

「そんなことない。ただ目に付いただけだよ」

わたしが少し褒めると、香住ちゃんは生真面目に照れた。

香住ちゃんは毎日何を考え、どうやって生きているのだろう。香住ちゃんの頭の中を覗いてみたい。きっとわたしなんかでは考えもしないこと、思いもしないこと。そんなものが詰まっているに違いない。

「本当に凄いよ」

誠実。希望。愛。幸運。

クローバーの四つの葉それぞれが示す言葉。

そうか、わかった。こんな漠然としたものが確信に見えるのは、香住ちゃんが言うからこそだ。

ピリリリ。ピリリリ。

朝食を食べて行くことを決めた香住ちゃんを、無理矢理ご馳走して、ひとりで帰るよと言い張った香住ちゃんを、無理矢理駅まで送った。そうしてひとり昨日は楽しかったなあか思いながら、ひとりでにやにや笑いながらいつもの家まで帰ってきた。そんな時だった。

どこかで平淡な電子音が鳴っている。なんの音かな。

暫くして気付いた。そうだ、昨日の代替機。すっかり代替機の存在を忘れていた。わたしの携帯電話はメロディーが鳴るから、こうも平淡な呼出し音だとひどく冷たい感じがする。代替機を借りているということは、そのわたしの携帯電話というやつも、今手元にないのだ。

代替機にはデータも入っていないんだっけ。一緒に飲みに行こうと計画していた豊美さんとのなし、まだ纏まってない。それでも連絡先がわからないから、わたしからは連絡できない。もしかしてさっきの平淡な電子音は、豊美さんからかな。

わたしは鞆の中を掻き回して、代替機を引っ張り出した。いつ見てもおじさんくさいデザインだなあ。

メールを開くのに少し手間取った。自分の使い慣れた携帯電話ではなかったからだ。

豊美さんからではなかった。昨日、家に泊まった香住ちゃんだっ
た。

——山口香住です。昨日はありがとう。すっごく感謝。本当にありがとう。この恩はいつか……！

メールボックスには香住ちゃんのメール、ただ一通だけが入っている。なんだか寂しい。だけど、特別な感じもする。

——香住ちゃんのメール、一番乗りだよ。昨日は楽しかったあ。こちらこそありがとう。

香住ちゃんのメールは、このおじさんくさい携帯電話のメールボックスに、一番に飛び込んだ。寂しそうだけど、どこか特別っぽいメールだ。

わたしは音楽を仕事にしている。毎週月曜日と水曜日は楽器店の二階で、バイオリンを教えている。先生、ということだ。

豊美さんはわたしと同じ楽器店で働いている、二つ年上の先輩だ。豊美さんからメールがきて、無事彼女とは連絡が取れた。

「最近碧ちゃん元気くない？」

「そうですね？」

豊美先輩の言葉に内心、びくつとした。わたしの心を見透かされているのではないかと思ったのだ。ここが居酒屋で良かった。もしお洒落な喫茶店とかだったら、黙りこくってしまったに違いない。

“日本一安い”が売り文句の居酒屋。周りの人はみんな思い思いに喋っていて、時々どつと笑い声が押し寄せる。

「わたし、結婚しようかと思ってるの」

豊美さんがそう言った。居酒屋の雑然とした空気の中で上品に光った。その言葉を理解できなくて、暫く固まってしまった。

「ええっ！ 誰、とですか」

「誰……っていきなりそこ？」

ことん。食器を置く音。

「ああ……いや、ごめんなさい。ご結婚、おめでとうございます」
わたしは頭を下げた。がはははと誰かが笑った。

「やっぱりとこで一体、どこで知り合ったんですか」

お待たせ致しました。店員さんの元気な声。

「ええー、それ話さなきゃ駄目？」

ビンゴ大会を始めます。マイクからの大きな声がした。

「駄目です」

あのね……。豊美さんは話し出した。さっきまで嫌がっていたのに、嬉しそうに話し出した。あのね、わたしと彼はね合コンで知り合ったの。はじめはなんだあの人って感じで、寧ろ違う人のことを

気に入ってたの。だけどその三日後くらいに、偶然にCDショップで会って……。

どこにでもあって、全然珍しくもないはなしだった。ベタなラブストーリーを嬉しそうに喋っていた。話している内容は下らないかもしれないけれど、豊美さんは幸せそうだった。恋は盲目。この言葉がすっかり当て嵌まる。

「恐れ入ります」

店員さんがビンゴカードを二枚、テーブルに置いた。

「景品つてあるんですか」

「ありますよ」

「じゃあ、頑張らなきゃ」

子供みたいに豊美さんははしゃいだ。多分照れ隠しのつもりなのだろう。なんだか、いいなあ。

「賞品はこの店の……なんと！ 千円引券です。三名様に差し上げます」

マイクから聞こえる声は自棄にハイテンションだった。

その声に乗りヒューと鳴らす人、正反対にビンゴなど我関せずと飲食を続行する人。いろいろな人がいた。わたし達はヒューとは言わなかったが、その声に乗った。わたしと豊美さんはそれぞれビンゴカードを手についた。

「では早速、最初の番号いきます」

35番！

「ないー」

「あつ、あつたあ」

「豊美さん、ずるいです」

42番！

今回は二人ともビンゴカードに穴が空かなかった。次々番号が叫ばれる。

12番！

15番！

「リーチの人居ますか。リーチになったら、リーチと大きな声で言っ
て下さいね。……まだリーチの人は居ないようですね。では次、
いきますよ」

47番！

「碧ちゃん、これはいけるかもよ。もう三つ横に並んでる」

「え、すごいじゃないですか。わたしなんてまだ一つしか空いてないのに」

あちこちからリーチという声が聞こえる。

「豊美さん、頑張ってくださいね」

14番！

「ビンゴの人ー、居ませんか。ああ、まだですね」

19番！

「あつ、リーチ。リーチ。碧ちゃん、リーチになったよ」
「叫んで下さい」

リーチ！ 豊美さんとわたしはうるさい程大声で怒鳴った。

「ビンゴですか？ カード頂けますか。確認致します」

「あー、ピンチ。ビンゴ出ちゃうかもね」

「そうですね。ビンゴじゃないように祈りますか？」

「なむー」

軽口を叩いているうちに確認が終わった。マイクを持った店員さんが、お客さんにビンゴカードを返しているのが見えた。

「ビンゴです！ おめでとうございます」

「ちつくしょー。千円持っていけた」

また二人で笑った。豊美さんもわたしも千円が惜しい訳では決していない。多分。少なくともわたしは惜しくなんかない。なんだか、騒ぎたい気分なだけだ。

「ところで豊美さん、いつ籍入れるんですか」

「明日」

13番！

「明日？」

「うん」

「明日？ マジ、ですか。失神しますよ、わたし」

「マジだよ」

「じゃ、じゃあ今日独身最後の日じゃないですか」

34番！

「そういうことになるね。ただし別れなければ」

豊美さんもわたしもがははと笑った。冗談でもおしとやかとは言えない笑い方だったと思う。だけど同時に嬉しかった。豊美さんは独身最後の日となるであろう今日、わたしを飲みに誘ってくれた。「結婚する前から別れること考える人ってどうなんですかね」

笑いながら、やっとそう言った。

75番！

「二人目ビンゴ出ました！ おめでとうございます。商品も残りあと一つとなっております。あと一つです」

「あと一つだって。頑張って下さいよ。わたしはもう揃いそうにないし」

「そうだね。頑張る」

そう言う豊美さんの仕草は、小さな子供みたいだった。だけど豊美さんの瞳の輝きが――瞳の輝きなんて言葉を使ったら、嘘っぽくなってしまうけれど――あまりにも大人っぽくて、どきつとしてしまった。多分豊美さんはわたしが知らない世界を、見詰めているのだろう。いつかわたしも掴めるかな。

頑張れ、豊美さん。豊美さんはわたしの道路標識みたいなものだから。

わたしのビンゴカードに空いている穴は三つ。一つは一番端っこ。もう一つは右から二列目の上から四段目。最後の一つは一番右の列の二段目。

豊美さんは上から四段目が揃いそうだ。待っている数字は。

「さあーで、これが運命の番号になるか。その番号は……」

わたしの道路標識にはしっかりして貰わなくちゃ。頑張れ、豊美さん。

4番！

「揃った、揃った。揃ったよ」

「えっ、嘘！ ……早く早く。行って下さい」

「う、うん」

わたしは豊美さんの背中をおもいつきり押した。豊美さんはぱたと子供みたいな足取りで急いだ。

たかが居酒屋の千円を賭けたビンゴ大会なのに、慌てている豊美さんがかわいかった。結婚しても、豊美さんは豊美さんだね。

ちょっと待てよ。さつき、豊美さんのビンゴカードの一行が揃うことになった、最後の数字。

あー、三人目出ました。賞品が出切ってしまいましたので、ビンゴ大会はこれにて……。

四番だった。

そのクローバーだけど四つの葉っぱそれぞれが、誠実、希望、愛、幸運を表しているんだって。香住ちゃんの言葉が更生した。

誠実、希望、愛、幸運。

わたしのビンゴカード。四の字はない。もう一度念入りに探してみたけれど、やっぱりなかった。

「おい、碧！　じゃーん」

ばおっと考え事をしていたわたしは、千円引券を自慢気に見せる豊美さんに現実に戻された。

「おっ、これで千円浮きますね」

「碧ちゃん、また来ようね」

「はい」

誠実、希望、愛、幸運。

豊美さんはその四つのものを手に入れたのだろうか。豊美さんのビンゴカードには四の数字が確かにある。

「豊美さんいいなあ」

わたしが呟いたら、豊美さんは恥ずかしそうに、柔らかく笑った。いいなあいいなあとわたしは繰り返し返した。

でも、大丈夫。いつかわたしだって。

今まで当たり前のように音楽一筋でやってきた。当たり前に音楽大学に入学し、当たり前に音楽を仕事として選んだ。だけどそれで本当に良かったのだろうか。他にも道はあったのではないだろうか。それがわたしの最近の悩み。先生に怒鳴られた原因。

「はあ……」

駄目だな。演奏中にこんなこと。わたしは弓を止め、バイオリン

を肩から落とした。

ピリリリリ。ピリリリリ。

柔らかいバイオリンの音が無くなった空間に、携帯電話の着信音が流れた。バイオリンの音と比べて、携帯電話からの電子音は驚くくらい硬いものだった。今度着信音を変えよう。今流行りの着うたとかに。

バイオリンを弾くのにも疲れた。疲れている時には素晴らしい演奏なんてできないとか尤もらしいことを考え、一息入れることにした。そういえば、最近疲れていないことはない。

わたしはバイオリンをテーブルの上に置き、携帯電話を手に取った。やっぱりおじさんくさい。

——今、あなたの家の前に居ます。窓を覗いてみて下さい。

香住ちゃんからのメール。わたしはくすつと笑って、わくわくした気持ちでその命令に従った。

半年前からひとり暮らしをしている。ひとり暮らしはいい教訓になるだろうと、両親も喜んで送り出した。やっと確保できた住み処は、ぼろぼろの、よくある、コンクリートで造られた、灰色のアパートだった。

さつとカーテンを開き、窓を覗き込む。

「香住ちゃん……」

見飽きた窓からの眺めに、異世界からの使者みたいな香住ちゃんが居た。わたしは窓を空け、ベランダに出た。襲ってくる洗濯物を押し退け、手に持っている携帯電話が、香住ちゃんに見えるように、業と大きく手を振った。

わたしの部屋は二階で、ベランダからはアパートの前の桃色の歩道がよく見える。

桃色の歩道に香住ちゃん。
灰色のアパートにわたし。

中々面白い状況だと思う。どっかの青臭い恋人みたいだな、そんなことを思いながら微笑んだ。香住ちゃんも、ここからではよく見えないけれど、笑っている気がする。

——どうしてここにいるの？　もしかしてわたしに会いに来たとか？

見せ付けた携帯電話で香住ちゃんにメールを送った。ははは。これじゃあ、初めて携帯電話を持った子供みたい。

香住ちゃんも携帯電話を鞆から出し、弄り始めた。わたしは香住ちゃんからの返事を待つ。

ピリリリリ。ピリリリリ。

さつきは冷たく聞こえた電子音だったけれど、今回は気にならなかった。この空間に、自然と馴染んだ。

窓の外の香住ちゃんが送ったぞ、という感じでわたしを見上げた。

——それもあるけど……（なーんて）。この道って買い物に来る時、いつも通るんだよね。よく考えてみたら、碧ちゃんの家の前でした。これって運命かも！

本当に、わたし達は何をやっているのだろう。青臭い恋人。初めて携帯電話を持った子供。それらと同じく、盲目で幼稚だ。

——運命かもね。

こんな青臭い恋人みたいなことをやりながら、初めて携帯電話を持った子供みたいなことをやりながら、くすくす笑って、生きていくのかなあ。

ピリリリリ。ピリリリリ。

あ、そうか。いつわたしが盲目で幼稚ではなくなったのだろう。今だって充分盲目で、幼稚である。

バイオリンの柔らかい音じゃなくて、機械が作った電子音。今はそんなに冷たく聞こえない。まだわたしの前にはいろいろな道が広がっていて、それを選び取り、進むことができる。携帯電話の電子音も、わたしを受け入れてくれるんじゃないかな。

わたしも桃色の歩道に降り立つことができるよね。

たくさんの楽器がショーケースに並ぶその横を通り、入口に立つ。扉の上に着いているだろうセンサーがわたしを嗅ぎ取って、ガラスの扉を開いた。扉が開くと、そこから冷たい風が吹き込んだ。

「寒っ……」

吐き出した息が白く染まった。もう冬になったのか。こないだまでは暑くてだらだら汗を流していたのに。そんなこと想像もできない。夏ってどれくらい暑いんだっけ。

ミルクティーが飲みたいな、あの“バーナードループ”の。冷たい風を顔に感じて、不意にそう思った。バーナードループというのは、未だに意味はわからないのだが、お店の名前である。バーナードループの紅茶は特別美味しいって訳ではないし、特別癖になるって訳でもない。だけど、なんだかとても飲みたい気分だ。

楽器店の前の横断歩道を渡った所に、そのバーナードループはある。店の入口に木で作られた看板が、ぶら下がっている。その看板には洒落た文字で、“バーナードループ”と綴っている。

わたしは横断歩道を渡り、バーナードループのドアを引いた。

「お客様、一名様でよろしいですか」

「はい」

「では、ご案内致します」

内装は垢抜けたファミリーストランのような感じである。

従業員の後に続く。全然目立たない、どこにでもいそうな青年、というのが彼の印象だ。わたしと同じくらいの歳の青年。まだこの人、ここで働いてるのかあ。

「こちらどうぞ」

レジから少し離れた、小さな丸いテーブルの元へ案内された。わたしはテーブルの脇の椅子を引っ張り、腰掛けた。

ご注文がお決まりの頃お伺いいたします、そう言い残し、従業員

は立ち去った。

何を食べようかと考えた末、舞い戻った従業員に、まずはミルクティー。ミルクティーだけでは申し訳ないから、おまけにチョコレートケーキを頼んだ。

このお店はよく豊美さんと訪れた場所だった。豊美さんはコーヒーが大好きで、いつもコーヒーを頼んだ。一方わたしはやっぱミルクティー。

あつという間の出来事だった。豊美さんは結婚してから半年後、わたしの勤める小さな楽器店を去った。子供ができたとか、できないとか。子供、だなんてわたしには遠い。

なんだかとても不思議だ。豊美さんには豊美さんの世界がある。さっきの従業員の青年だって、青年だけの世界が存在するに違いない。今、窓の外を通ったおじさんだって。車の中の子供だって。地球の裏側で生きる人だって。頭のどこかではわかつていたことで、見ないふりをして忘れていたことだった。だけど豊美さんが仕事を辞めて、再び気付かされた。せつかく忘れることができていたのに、それこそ世界中の人みんな、それぞれの世界を持っていること。その中にひとつとして同じものはないこと。だからわたしなんかはでっかい世界と比べたら、とんでもなく小さなものだ。

窓から楽器店が見える。立派で綺麗な店ではなくて、ぼろぼろで今にも潰れそうな楽器店。隣の文房具屋に比べて、楽器店から発せられるひかりは古くて、暗いのが見て取れる。あの小さな楽器店にひとり、わたしは取り残されてしまった。

豊美さんが居ないのは、思ったよりずっと悲しいことだった。今わたしがこのお店でひとりミルクティーを待っていることも、その例のひとつである。豊美さんとぺちゃくちゃ話しながら、待つつもりだった。あのね碧ちゃん、新しく来た生徒さん超悪ガキなの！もうどうにかして欲しいわ。いつかの豊美さんの言葉が甦った。だが急にその映像は色を失った。あんなに鮮やかに見えたけれど、もうそれを再生することはできなかった。

「お待たせしました。チョコレートケーキと、ミルクティーでございます」

かしゃん、かしゃん。食器同士が擦れる音を鳴らしながら、丸いテーブルに収まった。

ミルクティーを一口啜る。うん、いつものミルクティー。

二口。

三口。

かしゃん。カップをソーサーに戻す。

おかしい。

何かが足りない。三口啜ったところで、物足りなさをどこかに感じた。何故だろう。もう一口飲んでみる。確かに、いつもと何も変わらないミルクティーだ。だけど、やっぱり何かが不足している。

携帯電話はすっかり回復して、わたしの元へ戻ってきた。帰ってきて一週間くらいは電気の接触の関係の為か、具合が悪かったが、それ以降は正常に働いている。おじさんくさい代替機。その電子音それらはわたしの前から姿を消した。まるで、一時の幻であったかのように。

チョコレートケーキの最後の一切れを口に運ぶ。ミルクティーは節約しながら飲んだので、あと三口くらいはあるだろうか。口の中でチョコレートケーキがとろけ、なくなった。微かにチョコレートの味が舌に残る。ミルクティーをまた口の中に流し込む。ミルクティーとの相性は抜群だ。

わかったよ、豊美さん。何が足りないのか。ようやく気付いた。ミルクティーとチョコレートケーキの抜群な相性が、わたしにそれを気付かせた。

それは、コーヒーの匂いだ。いつも豊美さんが注文する、コーヒーの香り。それが足りないものだった。

ひとりだつて、わたしはやっていける。ずっとそう思っていた。……違う。ずっとじゃないか。中学の時、仲のいい友達が遠退いた。その時はその考えを打ち消した。ひとりというのは思いの外、寂し

いものだ。この表現が正しい。ずっと、忘れていた。

ミルクティーがコーヒーの香りを欲している。

人はひとりでは生きていけないとか、よく聞く言葉。在り来りな台詞。ずっと綺麗事だと馬鹿にしていた。だけど、それはばつちりのを得ているのかもしれない。的中しすぎていて、あまりに多くの人が考えるから、綺麗事だと思われてしまうのかもしれない。

残り少しのミルクティーは寂しそうに見えた。それが見ていられなくて、一気に飲み干した。

ほら、大丈夫。ミルクティーはコーヒーから離れられる。空っぽのカップが語った。同時に今、何かをなくした。

勢いよく席を立ち、鞆を抱き抱えた。そしてお金を払う為、レジへと向かう。

「千二百六十円でございます」

細かいお金を扱うのは面倒なので、千円札を二枚置いた。

「二千円からお預かりいたします」

「はい」

「こちらお釣りになります。ご確認下さい」

豊美さん、豊美さんだけの世界があるように、わたしだけの世界があるかな。

特別な、世界。

「いつも、ありがとうございますね」

わたしは従業員の青年に言った。豊美さんがいつも言っていた言葉だった。だってここへ来る度、いつもこの青年がいるんだもの。

従業員は不思議そうな顔をした。その視線を受けながら、ドアを押した。不思議そうな視線が、なんだか面白かった。

冷たい風がわたしを襲った。

穿いた息が白く染まる。それはわたしの体が温かいことの証明でもあるのだ。

わたしは仲間である楽器店にさよならをした。また明日と言うことはできなかった。仲間であるからこそ。だが、明日もきつと来て

しまう。

驚いた。香住ちゃんの名前を本屋で見た。

本屋なんてわたしは滅多に入らない。デパートのCDショップに寄ったらその隣が本屋だったから、ちょっと通って行こうと思っただけだった。だけど本そのものは嫌いじゃない。学生の頃は自ら図書室へ走ったものだった。

たくさんの紙の塊が永遠に並ぶ。本屋というのは不思議な場所だ。何か一冊買って帰ろう。時間をかけてゆっくり読めばいい。本が醸し出す独特な雰囲気酔いに酔い、だんだんとそんな気持ちになってきた。文庫本の棚の前を、ぶらぶら歩く。どうせだったら面白そうな装丁が綺麗な本がいい。

わたしはある一冊の本を手にとった。題名もかっこいいし、装丁も綺麗だし、この本がいいかな。でも他も見てもいいし。また、本棚に戻した。

そんな時だった。香住ちゃんの名前を見たのは。

その本の左側だった。親指が山の字に触れた。

山。

指をすると下へ滑らせる。

山口香住。

香住ちゃんの名前だった。

でも同姓同名かもしれないし。それに普通はペンネームを作るでしょ。わたしはそう思いながら本を持ち上げ、裏表紙を一枚ぺらっとめくった。

頭が、真っ白になった。わたしの鼓動が早く波を打ち出す。

先程の考えは綺麗さっぱり吹き飛んだ。そこには香住ちゃんの顔写真が存在した。写っているのは、他の誰でもなく、香住ちゃんだった。

山口香住という活字。香住ちゃんの顔写真。本屋の独特な雰囲気までもが、わたしの何回りも何回りも優れた力を持っていた。

わたしは早足で本屋を出た。香住ちゃんの名前から遠退いた。確かに、何かからの脅えを感じながら。

友達なら香住ちゃんの本を買って帰るべきでしょう。何故買って行かないの？ 脳裏に映る、香住ちゃんの名前が、顔写真が、本屋の独特な雰囲気、わたしを責めた。本の中で微笑む香住ちゃんと同じ顔で。

逃げるようにして駅へ急ぎ、電車に飛び乗った。事実、逃げているのだと思う。電車がホームにたどり着くまでのほんの数分間も恨めしかった。何故だろう。どうしてなのだろう。何故、逃げているのだろう。どうして、香住ちゃんの本を買って来なかったのだろう。普通だったら香住ちゃんの本を買って、凄いじゃんってメールを送るはずなのに。

とてもとても嬉しいはずなのに、なんでわたしは泣きそうなのだろう。

電車にたくさんの人が乗っていることはわかった。けれどその誰かが遠い。わたしと、手が触れている吊り革と、がたんごとんと刻む一定のリズムだけがここに存在していた。窓の外のビルの明かりが現れては消える、あの暗闇の中にいるみたいだった。

わたしを取り囲む世界が、完全な暗闇だったならどんなにいいだろう。そうではない世界が、わたしを嘲笑った。光り出すことのできないわたしを。

ビルの明かりがわたしの瞳に映る時、十字架を作った。

飛ぶことができないわたしを、みんなが追い抜かしていく。輝くことのできないわたしを。ひかりの下をわたしは歩いている。

わたしは恐いんだ。飛ぶことが。飛ぶという行為は大きなリスクを生む。吹き付ける風がわたしを落とすかもしれない。それともスタミナ不足で、自ら落下するのだろうか。わたしは落ちることを恐れている。泥の上を這わなくてはいけなくなるのではないかと。

豊美さんも、香住ちゃんも、こないだまでわたしと話して笑っていたのに、今は遠かった。自らの翼を見つけ、飛び立って行った。わたしだけが取り残された。

飛ぶとことで、輝き出せる切符を握る。

結局のところ、わたしは失敗するのが恐いのだ。わかっている。無理して忘れたふりをしていただけだ。

毎日毎日同じような繰り返しに思えて、毎日毎日少しずつ変わっていく。みんなみんなわたしを置き去りにして。わたしだけが変わっていないのかと思うと、とても不安だ。わたしはどうすればいいのだろう。

適当なベートーベン。楽譜なんてないも同然。

豊美さんのばかやろう。香住ちゃんのばかやろう。泣いてしまいたい気分だ。トイレにでも籠ってひとりで泣こうかな。道路標識はさっぱり見えない。わたしの目が霞んでいるのか、ただ単に距離があるのか。それに香住ちゃんもわたしの妹なんかではなかった。わたしよりずっと先を歩いている。

曲のサビの直前でバイオリンを降ろした。というよりは力が入らなかった、という表現の方が適切だろうか。心のどこかで弾けないと思ったからだ。そんなエネルギーはわたしにはない。

わたしは荒々しく楽器をケースに入れた。バイオリンケースの蓋が、いつもより大きい音を出した。楽器を布で拭かなかった。一回くらい大丈夫。楽譜をばつと掴み、鞆に押し込んだ。譜面台を乱暴に部屋の隅に押しやった。

ばかやろう。ばかやろう。

扉のノブをおもいつき押しして、駆け出した。

こん、こん、こん。

「あつ、すみません」

「ごめんなさい」

ブーツの音が三回聞こえたところで、急ブレーキをかけた。目の

前に人がいたからだ。わたしとは全く違うトーンの声なので、男の人であることがわかった。もしこれが漫画だったら、おもいつきり尻餅をつくところだろうな。そして「痛いじゃない！」から始まって、初対面にも拘わらずテンポのいい喧嘩を繰り広げる。とりあえず尻餅をつかなくてよかった。

「あの……」

下らない妄想から離され、はっとした。今まさに、わたしがそういう状況に追い込まれていた。

聞き覚えのある声だった。傷だらけのローファーから顔を上げる。「今日からここでピアノの講師をさせていただくことになりました、若林です」

若林、さん。

聞き覚えのある声。

目立つた特長がないと感じてしまう容姿。

声に聞き覚えがあるのは、過去に会ったことがあるからか、似ている声の人が居るからだろう。そう考えると、何故か前者の方がずっと正しいような気がしてきた。

「どこかでお会いしたことないですか」

暫く経ってから青年が口を開いた。

「貴方もですか？ わたしもそんな感じがしてたんです。そうですね、どこかで」

相手も同じ感覚を持っているのに驚きながらも、思考はフル回転を始めた。どこで会ったのだろう。どのような関わりを持ったのだろう。もしかしたら関わりなんて始めからないのかもしれない。会ったことだってないのかも。そんなことが度々頭の端っこを通る。でも考えるのを止めることはできなかった。

青年を盗み見たら、彼も考えていた。ふたりで同じことを考え込んでいると思うと、なんだか不思議だった。うーん。目の前に現れた人物は誰なんだろう。

「わからないですね。いつかきっと思い出せますよ」

「それもそうですね」

青年の、若林さんの声にわたしは頷いた。いつかきつと思い出せる。

だがその“いつか”は思うより、ずっと早くやってきた。

「ああっ！」

「どうかしました？」

「思い出しました。貴女、お客さんですよね？」

「お客さん？」

バイオリンの備品を買いに行く店？ それとも家の近くのコンビニ？ 最寄り駅の車掌さん？

もしかして。

「バーナードループの店員さんですか？」

わたしは恐る恐る問い掛けた。

「そうです。バーナードループでバイトしてます」

あの目立つ特長のない従業員。豊美さんといつもからかった。

「わあ、驚きました。あ、わたし古賀です」

軽く頭を下げる。まずいな、と思った。豊美さんと散々からかったからだ。まさか、こんな人とこんな所で会うなんて。

ふと下を向くと、若林さんのローファーが目に入ってきた。傷だらけのローファーは胸を張っているようだった。彼は豊美さんの代わり、ということなのだろうか。

「凄いですね。こんなこともあるんですね」

「確かに物凄いですね」

凄い凄いまるでドラマみたいだと、ふたりで言った。本当に物凄い偶然だ。いつもミルクティーを飲みに行くバーナードループの従業員が、この楽器店のピアノの先生になる人だなんて。本当びっくりだ。

ベタな展開のドラマを見て、こんなことあるのかよとツツコミを入れるけれど、本当に驚く偶然がこの世界にはある。メロドラマもびつくりである。そういうことが時たま、本当に少ない確率で、だ

けど確かにあるのである。

「相当縁があるのかもしれませんが。それと……」

若林さんの目が光って見えたのは、気のせいだろうか。本当に一瞬。ことんとローファーが動く。

「貴女、バイオリンうまいですね」

「あつ、ありがとう」

そう言つて、彼はレッスン室へ消えていった。パタンと優しく閉まるドアの音が、彼の容姿とは比べものにならない程、印象的だった。

そのすぐ後、ピアノの綺麗な旋律が教室から洩れた。わたしがさつき弾いてた、バイオリンの音なんかは足元にも及ばないだろう。

じゃあ、どうして？ あんなに綺麗な音を奏でる人が、わたしの出鱈目の演奏を褒めたの？

貴女、バイオリンうまいですね。

本当に？ 有り得ない。嘘に決まっている。彼は喧嘩を売っているのではないだろうか。ピアノの先生だとするなら、楽譜を無視していることくらいはわかる。弾いてる人の心情だって大体は。ぐずった子供の演奏なんて最悪だ。弓を乱暴に動かして。

心情？

心情、か。

あんな見ず知らずの人にまで、わたしは心配されてしまっているのだろうか。

こつん、こつん、こつん。

わたしのお気に入りのブーツは寂しそうな音を出しながら歩いた。決して胸を張るぼろぼろのローファーには、追い付けそうになかった。

ばかやろつ。

ピアノの旋律がわたしの背中に響く。

寒いな。

若林さんは意地悪だ。わかっているはずなのに。目茶苦茶な演奏だつて。

駅は今日も人で溢れ、留まることを知らない。今、女子高生とぶつかつたおじさん。あのおじさんにだつて妻子はいるのだろう。いや、案外波瀾万丈な人生を送っているかもしれない。痴漢でもしてリストラされて、奥さんに逃げられちゃつたかも。

今日はバーナードループには行きたくない。若林さんに会つてしまふかもしれないし。さつき楽器店にいたから、会うつてことはまづないけど、なんだか絶対行きたくない。

ふつと黄緑色の四枚の葉が、意識の表側に現れた。四つ葉のクローバーを思い出した。香住ちゃんの顔が浮かぶ。少女のように、可憐な。言っていた。なんだっけ。香住ちゃんが言っていた。一つ一つの葉っぱが、それぞれ意味を表しているとか。なんだっけ。香住ちゃんが言うから信じられる、四つの言葉。なんだっけ。なんだっけ。思い出せない。

頭の中に存在する四つ葉のクローバー。わたしに話し掛けてはくれないだろうか。

誰かの肩がわたしにぶつかつて、わたしを揺らした。それを合図にでもするように、頭の中のクローバーはどんどん色を淡くし、散つていった。

鮮明に見えていたものが、目の前で崩れていく姿。少し前にもこんなものを見た。このまま崩壊が進めば、わたしというものはなくなつてしまふ。不安だ。とてつもなく。

不安なら、解決策を考へろ。壊れていったものがわたしに言つた。そうか。そうだった。わたしはわたしを守ればいい。簡単なことじゃないか。そう吟味したら、解決策は案外早く思い付いた。

本物のクローバーを探しに行けばいい。決して、消えてなくなることのない現物。

私案が沸き上がった。自分の一番奥底から沸き上がってくる衝動、そのものだった。大袈裟なんかではない。四つ葉のクローバーを見

つけることができたなら、四つの言葉も思い出せる。

四つ葉のクローバーを探そう。まず土がある所に行かなくては。辺りを見渡した。驚くことに、土なんかどこにもなかった。目を疑う程、造りもので溢れていた。人間が勝手に造りだしたもののばかり。人間の多さに、造りもののばかりの世界に、くらつときた。この世界は何かが狂っている。

こんな所に留まっても仕方がない。そう考え、電車に乗り込んだ。わたしはどこへ向かうつもりなのだろう。人事みたいにぼんやり思う。そういえば電車の窓から川が見えたなあ。ぽつと頭の奥で生まれた。よし、川の近くに行こう。

それからは何も思案しなかった。本物の四つ葉のクローバーと、思い出せない四つの言葉が、頭の中をぐるぐる這う。

橋を渡ったのが見えた、その次の駅で電車を降りた。切符で改札を出た。小さくもなく、大きくもない、ホワイトを基調として使った普通の駅だった。

わからなかった。普通すぎる駅の普通すぎるホワイトに、目がまわった。わからない。どこへ向かえばいいのだろう。だが、それは当たり前である。初めて降りた駅なのだから。別に駅が普通の大きさであるとか、ごく普通のホワイトが散らばっているとか、そんなことは全然関係ない。

「川、川はどこですか」

一緒に電車を降りてきた人に聞いたつもりだったが、無視されてしまった。同じ質問を何回か周りの人にしたが、わたしの存在は否定された。

そうしているうちに、次の電車から降りた人達の波が来た。その波に吞まれながらも、わたしは聞いた。

「川はどこですか」

「そこを左に曲がるんすよ」
左。

やっと答えてくれた。

だがお礼も言わずに突っ走った。ただ凄くちやらちやらした男の人だったことを覚えている。ズボンは腰まで落としていたし、口の周りにはピアスが見えた。

走って、走って、走ったら、ようやく川の土手が見えてきた。途中、自転車のおじさんにぶつかりそうになった。おじさんは危ねえぞと怒鳴った。もう、おじさんなんてどうでもいい。とにかく、四つ葉のクローバー。四つの言葉。

やっとのことで土手へ続く階段を見付け、上ることができた。その土手には中央に一本の舗装された道が走り、その道の両端は土になっていた。いろいろな草が背丈を競っている。小学生の理科の授業で登場した草が、たくさんあった。担任だった先生の顔はぼんやり浮かんだけれど、草の名前は何ひとつ思い出せない。

クローバーの群集を求めて、草の中をはいずり回った。必死になつて探した。コートが汚れるのも、ブーツに傷がつくのも、構わなかった。

四つ葉のクローバーはどこにあるのだろう。四つの言葉はなんだったのだろうか。

一つ一つクローバーではないかとチェックした。周りが暗くて、クローバーであるかのように見えるものがたくさんあった。何回も何回も騙された。よく眺めてみると、違う草なのだ。

あれも。

これも。

それも。

みんな。

クローバーじゃないのかもしれない。

たくさんの草に嘲笑られているような気分になった。低い草丈がぐんと伸びて、わたしを潰すように思えた。有りがちな感覚だ。きつとわたしはそんな有りがちなものしか見れない、ダメ人間なのだろう。

「なんでよ。なんで」

わたしだけ。

四つ葉のクローバーが見付からないの？ 香住ちゃんだって、豊美さんだって、若林さんだってきつと持ってる。

「どうしてよ……」

コートのポケットの中の携帯電話が震えた。返答なんかしてやらない。したくない。

携帯電話のバイブを無視した。わたしは草むらを脱出して、コンクリートの歩道にしゃがみ込んだ。草むらから目を離れたかった。

わたしの瞳に、川向こうのビルのネオンは、自棄に輝いて映った。眩し過ぎて現実感の欠片もない。わたしはいつもあの中にいるのだろうか。あの中でうじゃうじゃ動く働き蟻にすぎないのだろうか。

馬鹿らしい。

そう感じた。

四つ葉のクローバーを探すことも。毎日忙しく動くことも。あの中にいる人の生活全部。所詮は働き蟻のすることですよ。

冷たい風が、目を醒ませと言う。けどまだ駄目。わたしの精神作用の根幹までは届かない。

人間って哀れな生き物だよなあ。

途端に思った。

「人間って哀れな生き物だあ！」

口に出して言ってみた。誰もいない真っ黒い川に向かって叫んだ。あーあ、本当に人間って可哀相。心の、これ以上ないくらい奥底から、同情する。だってそう思わない？ 何一つ意味なんて存在しないのに、生きていかなくてはならないのだから。進むべき道さえ実感できないこの空の下。

きっと神様が人間に与えた罰だ。ものをごちゃごちゃ考えることのできる心は。そんな人間に命を授けたのは。神様に許可を取らないで、わたしは勝手なことを考えた。

わたしを寒がらせる為か、風が吹き付けた。歴とした冬の、風。はっと気付いた。今は冬ではないか。クローバーなんてある訳が

ない。

益々、情けなく、可笑しく思えた。

本当、馬鹿だ。

みんなみんな神様の作戦に嵌まっている。勿論、わたしも。作戦に嵌まって、ごちゃごちゃ考えて、苦しむ。本当馬鹿みたい。

人が歩む道は、最初からみんな決まっているのかもしれない。わたしがバイオリンに触れたことも。香住ちゃんと席が隣同士になったことも。豊美さんとあの楽器店で出会ったことも。バーナードルの若林さんが実はピアノの先生であることも。神様が考えたシナリオ通りに、わたしは動いているのかもしれない。だから、香住ちゃんの言葉は、やっぱり正しいんだ。

これって運命かも！

神様。居るか居ないかわからない神様に話し掛けた。こんなわたしですが、どうぞよろしく。なんか年賀状みたいだけど、どうぞよろしく。

ねえ、オリオン座が見えるよ。誰かに向かって投げたい言葉。その言葉を受け取ってくれる奴はいないだろうか。

香住ちゃんにとっての本。

豊美さんにとっての子供。

わたしにとっての――。

わたしの特別な世界と、奴の特別な世界がずっと重なるような。

こんなこと言ったら怒られてしまうかもしれないけど、神様なんているのは人間が創り出したものだ、わたしは思う。この世で生きていくことの悩み苦しみの、よりどころを自ら創ってしまったのだ。勿論わたしもどこかに神様を設け、一方的に祈ってしまう人間のひとりなのだろうけど。

さつき駅で見た造り物を狂っていると感じたけれど、この神様は……。

狂っていない？

嘘。大嘘。これだって充分狂ってる。みんなメンタルクリニック

に行った方がいいかも。だって自分の苦しみを紛らわす為だけに、祈る対象を勝手に創り上げて、根拠なんかどこにもないのにも関わらず、それに向かい祈り続ける。どうしたのか。やばい。おかしい。ありえない。正しくこんな感じ。

神様。この通りわたしは、人知を超えろとか言う神様の存在なんて信じてないし、神頼みなんか真っ平だよ。だけど、どうぞよろしく。

オリオン座が見えるよって言える相手を。

オリオン座から目を離して、草むらを見た。四つ葉のクローバーが見付かりました。ぱちぱち。ということは当然なく、ただわさわさ揺れる草が暗闇に佇んでいた。

だけど、その代わりにとてもいいことを思い付いた。

数日前、香住ちゃんからメールが来た。高校の同窓会をやるらしい。香住ちゃんから告げられたメンバーの中に、仲のいい人はいなかった。だが、わたしは香住ちゃんに会えるというだけで嬉しかった。ブーツをことごとく鳴らしながら、スカートをひらひら翻しながら、浮ついた足取りで同窓会へ向かった。

わたしが同窓会の現場である、居酒屋と少し高級なファミレスの合いの子のような店に突入した時、既に現場は盛り上がりつつあった。

「こんにちはー」

部屋はたくさんの方と、笑い声で満ちていた。碧ちゃん？ 碧ちゃんだよな？ そんな声があちこちから聞こえた。

「そうです。碧ちゃんです」

ちよっとふざけた感じでわたしは言った。懐かしーとの声を浴びながら、少し薄暗い部屋に入った。

こういう馬鹿騒ぎ、嫌いじゃない。

ひとつ気になることがある。それは香住ちゃんの行方だ。薄暗闇の中に、香住ちゃん存在を探す。

「碧ちゃん！」

わたしを呼ぶ声の方向に、香住ちゃんを見付けた。一瞬、暑かった夏の喫茶店を思い出す。むわっとした暑さの空の下から、冷たいクーラーの中へ。その心地よい肌への変化を思い出した。碧ちゃん！ 暑い夏の日、香住ちゃんの声はひんやりした人工的な風の上に浮かんだ。その時も香住ちゃんは、わたしの名前を呼んだ。

ここ、ここ、と香住ちゃんが隣の座布団を指差している。今は夏じゃない。だが、やはりわたしは香住ちゃん笑顔に完敗して、香住ちゃんの隣に収まることにした。

「久しぶりだね、香住ちゃん」

本当だと香住ちゃんは頷いた。

香住ちゃんに会って、嬉しくなってしまうのは何故だろう。今も、もう嬉しい気分になっている。それは彼女がかわいいからかもしれないし、彼女が発する特有の空気のせいかもしれない。いやいや、もしかしたら香住ちゃんに惚れているのかも。……うーん。それは流石にないか。

暫くして、ひとりの男の子——確か野球部の大野君——が、近況報告しようぜと言った。みんながその提案に乗り、大野君から時計回りに自分のことを話し出した。実はわたし結婚しました。俺はエンジニアをしています。

同じ場所に、同じ時間に、縛られていたにも関わらず、みんなそれぞれ違う道を行く。そのことが不思議だ。だが、当たり前なことだとも思える。

やがて、わたしの番になった。

「今、バイオリンを教えます」

すごいと、川上さんが言った。

川上さん、学生の時はすぐスカートが短くて、いつも少し恐かった。わたしよりずっと高い場所にいる人みたいに感じてた。だけど今は違う。そんなことは微塵も感じない。同じおばさん、まではいかないけれど、同じお姉さんだ。

「それって先生ってこと？」

甲高い川上さんの声が聞こえた。

「そういうことになるね。だけどさ、あんなの親の自己満足だよ」

「でもでも、先生ってだけですごいじゃない」

そうかなあ、と首を傾げた。だが、わたしにはそれしかない。樂觀的に考えれば、それがあるとも言える。バイオリンしかない、だけどバイオリンがある。そんなわたしを受け止めよう。受け入れることはできそうにない欲深い人間だから、せめて。

久しぶりに会った友達とも、昔はあまり仲が良くなかった人とも、話することができる。学生の頃は何にも縛られていないように思

えて、いろいろなものに縛られていたのだと感じた。皆それぞれの道を歩き出した今となつては、学生時代のあいつは服がださいとかださくないとか、そんなことは関係ないのだろう。

次はわたしの隣の、香住ちゃんが現状報告をする番となつた。みんなの視線が香住ちゃんに集まる。

「わたし、作家をやってます」

みんなの驚きは、一際だった。正に、本日のサプライズイベント。なんていうペンネーム？ 絶対買うよ。それで自慢する。これ俺の友達だつて。

途端に、香住ちゃんは大人気となつた。そんな香住ちゃん存在をもキヤッチしようと思う。大人気の香住ちゃんを受け止めることは、わたしが生存する為の手段であるから。

時間が少し経つて、香住ちゃんへの質問も止み、現状報告のマイクは次の人へと運ばれていた。そんな時だ。相変わらず部屋は暗いし、笑い声で溢れている。

「凄いよね、香住ちゃんは。本とか出しちゃってさ」

わたしは香住ちゃんにしか聞こえない声で呟いた。

「そんなことない。わたし、碧ちゃんが羨ましかつたんだよ」

香住ちゃんから返ってきた言葉は、予想さえしないものだった。

「羨ましい？ わたしが？」

「うん」

「どこがよ？ 香住ちゃんの方が羨ましいよ」

香住ちゃんの瞳が一瞬、物凄く弱いものに見えて、わたしの胸はドクンと鳴った。本当に一瞬。

「だって碧ちゃん、バイオリン弾けるじゃん。特技を持ってるのつて、いいなつて思ったの。ほら、わたしはなんにもないし」

気さくに話す香住ちゃんから、さっきの憂いを感じることはない。だからわたしは言い返すことができた。

「あるじゃん！」

「でもあんな曖昧なの、不安定すぎるよ。今作家っていうレッテル

を背負ってるのも、奇跡みたいなものだもの」

香住ちゃんは喋る準備でもするかのように、コップの水を口に運んだ。

「……覚えてない？ 碧ちゃん。碧ちゃんのねバイオリンの演奏聞いて、みんなすごいすごいって言ってたの」

わたしの思考は居酒屋と高級ファミレスの合いの子を、飛び越える。

西日を浴びる放課後の教室。たくさんの机が並ぶ。輝く目でわたしを見る友達。そこに流れる自信過剰のバイオリンの音。教室の風景が、わたしを見る友達の瞳が、自信たっぷりの音楽が、わたしの頭に蘇った。

そうか。そんなこともあったっけか。いつもバイオリンを担いでいたから、友達から何か弾いてみてよとせがまれることがよくあった。駄目だよ下手だしと言いながら、実は弾く気になっている。

渋々といった感じで、バイオリンのケースに手を掛けると、歓声が巻き起こる。その歓声を浴びながら、誇らしい気持ちで音楽を奏でたものだった。

誰にもできないことを、わたしだけが熟していると思い込んでいた。もしかしたら演奏家として、海外で活躍できるんじゃないかって、そんなことを本気で考えてもいた。舞台の上の自分を想像したりもした。

「香住ちゃんてさ、妹みたいだね」

制服姿の自分を残しつつ、呟いた。

「妹？」

香住ちゃんは制服を着ていない。自分の身体を見たら、わたしも制服を着ていなかった。

「そう。わたしの妹分」

制服を脱いだ今でも。

何それー。香住ちゃんは膨れつつも笑っていた。わたしも、笑っている。

ああ、あの時の自信が消えてしまったのはいつだったのだろうか。

二次会行くやつ。誰かが大きな声で叫んでいる。

「碧ちゃん、どうする？」

「え、何が？」

「二次会」

「ああ、二次会。どうしよう。でもなあ、家に帰ってもいいことないし。うん。……行く！」

今日は騒いで騒いで、騒ぎまくろう。

「香住ちゃんは？」

「じゃあ、わたしも！」

思いつきり、騒いで来よう。

四つ葉のクローバーを探し回ったあの日以来、川の土手が好きになつて、暇があつたらそこへ向かうようになった。穏やかに流れているであろう黒い川を見ると、がらがら輝くネオンの中で生活していることがみみちちくなってくるのだ。

みみちちくなったからといって、今の生活を放り出したい訳ではない。むしろ大切にしたい。ただそのみみちちさを、たったそれだけのことを、受け入れる力量は今のわたしには備わっていない。かつこいい覚悟みたいなものができた訳でもなくて、それだけ。だから何も考え付かなかったふりをしようと思う。

木曜の夜七時。新しい生徒さんが入るから。

はい。わかりました。

新しい生徒さんが来る時は、いつでもドキドキする。どんな悪ガキだろうとか、どんな説教くさい婆さんだろうとか。だけどこの時は、あらゆる心配は全体的を外れ、そのなん回も先を行っていた。

「失礼します」

若い男の人の声だ。お父さん、とか？

「どうぞ」

「こんにちは」

「こんに……」

驚いた。とにかく驚いた。どれくらいかというと、危うくバイオリンを落としそうになっただくらい驚いた。

「若林……さん？」

扉の前に立っているのは、他の誰でもなく、真正正銘の若林さんだった。驚いているわたしを見て、若林さんは笑った。

「覚えてくれていて光栄です」

「どっ、どうしてここに？」

「当然でしょう。あなたにバイオリンを教わりに来たんです」

「本当ですか？」

「本当です」

「新しい生徒さんって、若林さんのことなんですか？」

「そうですよ」

「もうっ、若林さんには驚かされてばかりです」

わたしが膨れたら、あははと若林さんは笑った。香住ちゃんの笑みとはまた違う、だけどこちらも嬉しくなってしまうような笑みだった。

「では早速ですが、レッスンを始めますよ」

わたしは業と先生つばく振る舞った。先生なのだけれど。

川向こうのビルのネオン。その下の闇に埋もれてしまいそうな、でも確かに存在する真っ黒い川。この場所にはわたしが今まで知ることのなかった、もしくは無視してきた、世界が広がっていた。

いつか感じたように、あの世界は狂っている。狂っているのが当たり前だから、長い間気付かなかったただけだ。きつときつと正しいことなんてない。何一つ。見方を替えてみれば、結局はわたし自身も常態を保ててはいないんだ。

偉そうに思う。

多分それが人間なんだろうって。

「碧ちゃん！」

その声に反射的に振り返った。

「わぁ、豊美さんじゃないですか」

「そうよ。碧ちゃんに会いに来たの」

「わはは。嬉しいです」

そこで気が付いた。豊美さんの腕の中。国語の教科書だったら、

“生命の息吹”とでも表現するだろうか。

「もしかして豊美さんの赤ちゃんですか」

「そうだよ」

わたしに似て美人でしようと、豊美さんは付け足した。在り来りな言葉だったけど、それがいい。それだからいい。わたしはそれに乗り、おもいつきり細い目で眺めておいた。在り来りな答えを返した。

「何よ。そこは頷いておくものの。後輩のくせに」

「はい。学習致しました」

このやろつと、豊美さんがわたしの頭を小突いた。

道路標識が見える。それに従おうか。それとも、違う方向に歩き出そうか。どちらがいいだろう。多分、どっちでもいいんだ。

川より大分高い堤防の上を歩いている。どこまで行くのだろう。

どこから来たのだろう。答えなんかない。わたしはどこから来て、どこかへ向かう。それが答えだ。いつまでも周りが見えない目を持って、同じ道に迷ってしまふ脳みそを持つ。

ごめんよ、働き蟻達。あなた方は大層素晴らしいお方だった。働き蟻達は皆、一生懸命に食物を運搬する。彼らがいなければ、あつという間に女王蟻の息は途絶えてしまふに違いない。

本屋で香住ちゃんの本を買った。あのどこか謎な香住ちゃんの実体に、少しは近付けるかな。

――四つ葉のクローバーをゲットしますよ（予定）。

――予定って何？

――予定は予定。

そう、わたしは四つ葉のクローバーを見付ける予定だ。ほぼ確定している。

かたんことんかたんことん。

背中のバイオリンがわたしと一緒に歩く。

真っ黒い空にもまた、世界があつた。星達が一生懸命に輝いている。その中でも一番目立つ星座。

「ねえ、オリオン座が見えるよ」

かたんことんかたんことん。

そうだね、って返答をした。わたしの背中のバイオリン。

かたんことんかたんことん。

いつか若林さんが言っていた。バイオリンにずっと憧れてたんだよね、って。どうしてってわたしが聞いたら、一生懸命に話してくれた。

「中学生の時だったかな。俺のレッスンしてる隣の部屋から、いつもバイオリンの音が聞こえて来たんだよ。ピアノのレッスンそっちのけで、その音に聴き入ってた」

「レッスン室の狭い窓から、中を覗いたりした？」

未だにわからないのだが、レッスン室には小さな、十センチ四方くらいの窓がある。その小ささは、防音加工を施したにも関わらず、無理矢理窓を作った故だろうか。

「はは。よくわかるね。覗いてたよ。綺麗な女の子だったぜ」

「ドラマチックだね」

「そんなじゃないけどさ。俺とその子は全く面識ないし。だけど、バイオリンの音色には完全に惚れてたな」

惚れてたな、なんてさらっと言うものだから、少しどきつとしてしまった。次に、その綺麗な女の子はわたしだったんじゃないかと、ありえないことをぼんやり考えた。

「本当綺麗だよな。ピアノって音が……音っていうか響きが、誰が弾いても、もしくは叩いても、同じだろ。でも弦楽器は違う。いろんな音が出る。素敵だよ」

わたしは今までバイオリンを扱ってきたけれど、バイオリンを素敵だと感じたことはなかった。

「若林さんには、完敗だ」
負けた。

わたしのバイオリンは彼には敵わない。わたしはバイオリンを愛していると思えたことはなかったし、その存在がなくなってしまうと願ったこともあった。

「かんぱい……？ どの？」

若林さんは漢字変換に苦労しているらしい。

「負けたってこと。完敗。完全にね」

若林さんはなんで、と表情で訴えた。暫くすると楽譜に目を戻し、難しい顔をした。そして、バイオリンを手探りで弾き始めた。

バイオリンを彼が扱うと、わたしとは違う音を成す。決して上手くはない。やっときらきら星が弾ける程度。技術はまるで初心者だけど、何色もの音を鳴らす。何故？

わたしも若林さんみたいな音が出せるといいな。一色じゃない、幾つもの音色。

もし今この世界から音というものがなくなってしまうたら、人間の五感のうちの一つが失われてしまったなら、世界が大混乱に陥るのは目に見えている。幾つもの企業が倒産に追い込まれるだろう。音楽業界を生きる人々にとっては希望をも手放すことになる。

バイオリンとそのケースが擦れる音を聞きながら、音のない世界を想像することにした。音のない世界。まず困ることはなんだろう。

まず言葉か。言葉は手話や筆談で代用できる。だけどやっぱりそれではできないことがある。例えば、背中を向けた恋人を呼び止めるとか。今までわたしはどれ程言葉に助けられて来ただろう。ああ、どうしよう。言葉がなかったら。失恋率が上がってしまうことになるではないか。

それから普通に音。例えば後ろに車が迫っていて、自分が轢かれそうな時でも、音がなければ気付かないだろう。だとしたら死亡者続出だろうか。

そのうえ、今のわたしの安心も存在しないことになってしまう。

音のない世界っていうのはどうも大変らしい。失恋は嫌だし、死んでしまったら元も子もないし。

それにほら、音楽がまずない。

音楽がない世界なんて考えられる？ 鼻歌も歌えないし、街に流りりの歌が流れることもないし、モーツァルトの音楽はリラックスするらしいと噂することもない。

つまらなすぎる世界だ、そう思った。

春の風が、吹いた。

わたしの鼻の先を撫でていった。冷たい冬の風じゃない。確かに春のそれだった。冬の風の乾いた匂いではなくて、ほんわりした空気を見付けた。

春の風が語り掛けた。わたしに。

香住ちゃんが言うから信じられる、四つの言葉。

誠実、希望、愛、幸運。

わたしはこんなことを探す為に、わざわざ川の堤防で泥んこになったのか。当たり前だった。こんなこと。

ふっと思う。いつからだっただろう。コートを着なくなったのはいつの間にかわたしが身に着ける衣服から、コートの存在が消えた。確かに、着実に、時は進んでいるということを思い知らされる。抗うことは決して不可能なその中で、留まることのできない寂しさを

感じながら、わたしは生きている。今考えれば若林さんのローファ
ーも、一抹の寂しさを持っていた。

携帯電話を取り替えようと思う。壊れた訳ではないのだけど、な
んていうか、そう、いい機会だ。何がいい機会なのかは言い表せな
い。だってぴったりの言葉がないんだもん。もしくはただ単にわた
し自身が、悟り知っていないだけなのか。

時々目の前を漂う春の風を感じながら、携帯電話ショップへ進ん
だ。いつかの暑い夏の日もこの道を通り、携帯電話ショップへ向か
ったつけ。それがとても不思議なことに思えた。あの時とは違う気
持ちで、気分で、また同じ道を通るとは。

携帯電話ショップが近付いてきた。たくさんの携帯電話が入り口
を飾る。

あ、今の携帯電話が役目を果たしているうちに、香住ちゃんにメ
ールを送ろう。香住ちゃんに伝えたいことがあったのだった。

——本当だよ。見付けられるの、四つ葉のクローバー。完全に春に
なったら、川の土手にクローバーを探しに行くのね。そこで三枚の
葉っぱのクローバーを二つ取る。一つは置いといて、もう一つのク
ローバーの葉っぱを一枚ちぎる。そのちぎった一枚の葉っぱを、何
もしないクローバーにくっつけると。そうしてそれを押し花にす
るの。そうしたら四つ葉のクローバーになるでしょ。

ガラスでできた透明な自動ドアを、わたしの体が開ける。包んだ
のは冷たい風ではなく、寧ろ暖かい空気だった。やっぱり時は動く。
地球は順調に回っている。

あの時とは違う。

少しジャンプをして、輝き行きの切符を掴もうか。精一杯神様の
作戦に嵌まってやろうじゃないか。

机の向こうに腰掛ける店員さんの元へと向かった。

「機種変更したいんですけど」

わたしが店員さんに投げたその一言で、どんなことは進んだ。わたしにとっては特別なことでも、彼女には有り触れた日常にすぎないのだろう。みんなみんな一つとして被りのない、それぞれの世界を持っている。

特別な、世界。

それでいい。だからわたしは、わたしの特別な世界に抱かれている。

「機種はこちらでよろしいですか」

店員さんがカタログを指差しながら言った。おじさんくさい代替機が頭を横切ったけど、それはわたしの中で全く価値を持たなかった。あんなの、冗談じゃない。だってあんなにセンスが悪いんだよ。「はい」

センスの悪い携帯電話は真っ平。決して強がっている訳ではなく、本気で真っ平だ。

「電話帳のデータ、こちらに移しますか」

あの夏の日、携帯電話が壊れた時、なかった選択権が今はある。電話帳のデータ、こちらに移しますか。

だけど、違う。

「いいです。データ移さなくて、いいです」
違う。

「かしこまりました」

わたしの新しい携帯電話は真っ白だ。一番乗りのメールは誰からだろう。さっきの返信をする香住ちゃんだろうか。親バカ豊美さんからの子供の自慢だろうか。それとも、いつもわたしを驚愕の淵へと導く若林さんだろうか。

面白い。これはとっても、面白い。

あの日とは違う。だけど確かにこの、古賀碧で。寂しくて特別な空の下で。

なんの歌を着信音にしようか考えながら、携帯電話ショップの自動ドアを抜けたら、さっきは降っていなかった雨が目に映った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1250d/>

一番乗りのメール

2010年10月8日15時10分発行